

「安心と希望の医療確保ビジョン」具体化のために～国民の目線から～

国際医療福祉大学大学院 大熊由紀子

料理の味や安全性にまるで関心を示さず、だれが支払うか、どれだけ値切るかを言い争っている人がいたら、そのはしたなさに、みんなあきれることでしょう。それとよく似たことが、長い間、日本では行われてきました。医療の質や安全性を真剣に考えない、国民を置き去りにした、医療費をめぐる論議と駆け引きです。

その結果、日本の医療費は安いことで国際的に有名になりました。一方で、国民が切実に求めている医療への配分は切り詰められてゆきました。「安さの秘密」を知ろうと日本にやってきた海外の専門家は、失望して帰ってゆきました。夜になると手薄になる検査や看護の体制、出産時刻を病院の体制にあわせるための薬剤使用を知って、「これは病院ではありません」と遠慮がちに述べた専門家もいました。欧米では病院は24時間機能しているものだからです。勤務医たちがふつうの日常生活を営めない過酷な体制を強いられている状況も日本独特のものでした。

今回の検討会で、医療スタッフの過酷な日々が焦点があてられ、論議が深められました。そのことは画期的でした。

けれど国民の目線、患者の目線、心ならずも医療事故の被害者になった方々の目から見ると、患者の安心より、医療提供側の安心を優先した発言が目立ったように思われます。

医師不足の解消は重要ですが、そのためには医学部の定員をただ増やすのではなく、志の高い人材が合格できる仕組み、教育の質を維持するための挑戦が不可欠です。診療科間の偏在を解消するには、各学会が、「ほんとうは、どれくらいの専門医が必要なのか」を虚心に算出して、それに応じて、専門医の育成をするといった姿勢が求められます。

国民が願っている医療の姿とは、たとえば、以下のようなものです。

1. 助産師と医師が連携した、安心して子どもを産める体制と医療保険でのバックアップ
2. 安心して子どもを育てられる小児科医療の確保
3. 頼りになる救急医療システムの構築
4. 安心し、信頼して闘病できる医療の質の確立
5. 福祉と医療の安定した連携による在宅ケアシステムの確立
6. 医療事故の再発防止・真相究明体制の確立

「モンスター患者」と呼ばれる人々の特徴は、裁判を起こさないことです。つらい医療訴訟に耐えている遺族たちは、「真実を知りたい」「自身の経験を次の悲劇をなくすために生かさなくては」という思いにつき動かされているのです。それは、大野病院事件のご遺族の例をみても明らかです。「大野病院事件が医療を崩壊させた」という委員もおられました、「医療が崩壊していたから」悲劇が起きた、と考えることの方が事実即しています。

「信頼」の重要性が検討会でしばしば語られました。そのためには、まず、「真実を語り」「隠さず見せる」という文化が医療者と患者のあいだに共有されていることが不可欠です。

国と医療界が、こうした国民の求めている医療の実現に向けて真剣に努力している姿を見せたとき、そして、医療者が患者をパートナーと考える文化を築きはじめたとき、国民の信頼が生まれ、さらなる経済的負担の同意も得られることでしょう。